

村内遺跡 II

埼玉県指定史跡 小倉城跡

第2次発掘調査報告書



郭1 南虎口石積み遺構

2005

埼玉県比企郡
玉川村教育委員会

口絵 1



郭1 南虎口1号石積み遺構（南西より）



郭1 南虎口1号石積み遺構（東より）

口絵 2



郭 1 内郭 2 号石積み遺構



同 2 号石積み遺構とトレンチ内石積み裏疊群

口絵 3



2号建物跡



4号建物跡

口絵 4



染付・白磁外面



染付・白磁内面



渥美常滑・備前・瀬戸美濃外面



渥美常滑・備前・瀬戸美濃内面



火鉢外面



火鉢内面

序

玉川村は、埼玉県のほぼ中央に位置し、清流と里山を中心とした自然豊かな木の香る村として発展してまいりました。

本村に所在する埼玉県指定史跡小倉城跡は、大規模な石積みの所在する中世山城として高い評価が与えられております。平成15年度からは国史跡化を目指し埼玉県発掘調査評価委員会・比企地域中世遺跡検討委員会の指導のもと、史跡の基礎資料を得るために、学術調査が継続実施されてまいりました。

今回報告分は、平成16年度調査分で、山城部分の中心である本郭内部でも石積みが大規模に巡ることが判明し、ますますその特徴が際だったものとして注目されるところであります。調査の成果により、小倉城跡の具体的な様相が明らかとなり、関東地方における中世城郭研究や戦国時代研究に、一石を投じることとなるものと思われます。

本書が、文化財保護や生涯学習資料として、また考古学、歴史学、郷土史研究等の基礎資料として広く御活用いただければ幸に存じます。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課、埼玉県立歴史資料館、地権者並びに地元関係各位に多大なる御指導御協力を賜わりましたことを厚くお礼申し上げます。

平成17年12月

玉川村教育委員会教育長

野口昌夫

例 言

1. 本書は、埼玉県比企郡玉川村大字玉川字城山ほかに所在する、県指定史跡小倉城跡（県遺跡番号 No. 041-022）の報告書である。
2. 発掘調査と整理作業は文化庁国庫補助金・県補助金・村負担金をもって玉川村教育委員会が実施した。発掘調査並びに整理・報告書作成作業は平成 16 年 5 月 6 日から平成 17 年 12 月 9 日に亘った。
3. 発掘調査は矢部亮司・石川安司が担当し、本書の編集は石川安司が行った。
4. 発掘調査から本書作成に至る間に下記の方々、諸機関からご指導ご教示を賜った。銘記してお礼申しあげる。（五十音順、敬称略）

浅野晴樹、伊藤正義、太田賢一、小野正敏、栗岡眞理子、齋藤慎一、坂井秀弥、柴田龍司、杉山正司、閔口和也、田中信、中島宏、西股總生、橋口定志、藤木久志、松岡進、水口由紀子、宮田毅、村上伸二、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課、埼玉県立歴史資料館、中世を歩く会

5. 発掘調査及び整理作業員

村田悦子 小野田照子 池永文代 浅見元一 小島忠一 根岸マサ子 蓮見寛子

目 次

I	発掘調査の概要 -	1
1	調査に至るまでの経緯 -	1
2	発掘調査と報告書刊行事業の組織 -	2
II	地理的・歴史的環境 -	2
1	地理的環境 -	2
2	歴史的環境 -	4
3	遺跡の概観 -	7
(1)	郭 1について -	7
(2)	郭 1 石積み遺構 -	7
III	遺構と遺物 -	10
1	遺構 -	10
2	遺物 -	15
IV	小結 -	19

挿図表目次

第1図	小倉城周辺概要図 -	3
第2図	小倉城周辺戦国期街道要図 -	3
第3図	周辺の遺跡 (1) -	4
第4図	周辺の遺跡 (2) -	5
第5図	小倉城跡概要図 -	6
第6図	郭 1 トレンチ配置図 -	8
第7図	中央トレンチ遺構配置図 -	9
第8図	中央トレンチ 1号建物跡 -	10
第9図	3号建物群 -	11
第10図	4号建物跡 -	12
第11図	南虎口第1トレンチ 1号石積み -	13
第12図	1号土壘第1・2トレンチ 1号石積み -	14
第13図	1号土壘第3トレンチ 2号石積み -	14
第14図	郭 1 上段第6トレンチ 3号石積み -	15
第15図	郭 1 出土カラケ -	16
第16図	郭 1 出土染付・白磁 -	16
第17図	郭 1 出土常滑・渥美 -	17
第18図	郭 1 出土瀬戸美濃・備前・在地火鉢 -	18
第19図	郭 1 出土鉄製品 -	18

写真図版目次

- 図版 1 南虎口石積み（2段目）同上鍵穴飾り金具出土状況 同上遺物出土状況
南虎口石列（東から）同上（南から）同上遺物出土状況
- 図版 2 2号石積み遺構（東から）同上（西から）同上（北から）
2号石積み遺構（北西から）2号石積み遺構裏疊群
- 図版 3 3号石積み遺構 1号建物跡柱痕 1号建物跡柱痕
- 図版 4 2号建物跡付近遺物出土状況 同染付C群出土状況 同白磁出土状況
2号建物跡 同備前・常滑出土状況
- 図版 5 3号建物群 同上 同上柱穴内白磁出土状況
3号建物群柱穴内白磁出土状況 同上 3号建物群
- 図版 6 4号建物跡 同柱穴 4号建物跡 同上 同上常滑出土状況
- 図版 7 郭1確認面岩盤掘削痕 同上 同上
郭1確認面岩盤掘削痕（連続鑿痕）郭1東堀切掘削面 同上鑿痕
- 図版 8 郭1出土カワラケ内面 郭1出土カワラケ内面 郭1出土鉄製品
郭1出土カワラケ外面 郭1出土カワラケ外面 郭1出土鉄製品

報告書抄録

フリガナ	ソンナイイセキ						
書名	村内道路						
調査名	埼玉県指定史跡小倉城跡第2次発掘調査報告書						
巻次	II						
シリーズ	玉川村埋蔵文化財調査報告						
巻次	第13集						
編著者	石川愛司						
編集機関	玉川村教育委員会						
所在地	〒355-0395 埼玉県比企郡玉川村大字玉川2490						
発行日	2005年12月28日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 道筋	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おぐらじょうあと 小倉城跡	さいたまけんひきぐん 埼玉県比企郡 たまがわむらおおあざたごろ 玉川村大字田畠 あしうやま 字城山1184	1 1 3 4 5	0 2 2	3 6 度 1 分 4 3 秒	1 3 9 度 1 7 分 5 5 秒 ~ 2 0 0 5 1 2 2 8	2 0 0 5 0 5 0 6 2 3 0 m ²	遺跡整備
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
小倉城跡	城郭跡	戦国	建物跡・道路跡・整地層 石積み遺構	陶器器（塗付、白磁、進戸焼 窓、涅釉、常滑、備前）、かわ らけ、鉄釘、碁石、板瓦ほか	本郭内部に難僅状の石積み遺 構を確認。		

I 発掘調査の概要

1 調査に至るまでの経緯

昭和 11 年に県指定史跡となった小倉城跡は、関係者の努力により良好に保存され戦後も地元小中学校の児童生徒が遠足で訪れるなど地域に親しまれた存在であった。その後昭和 40 年代以降の急速な生活様式の変化と 50 年代以降の松食い虫による赤松の枯死は小倉城においても例外ではなく一部に荒廃が見られる部分もあった。そのような中、玉川村では昭和 61 年度策定（目標年度平成 7 年度）の第 2 次総合振興計画において「小倉城跡の整備」を挙げ史跡公園として整備することが提唱された。教育委員会では、それを受け平成 4 年度に城跡の測量調査を行い、5 年度には城跡の保存管理に関する地元説明会を実施した。その中で城跡内山林の荒廃に伴う下草刈りなどの環境整備の必要性が話題となったのである。そして、まず行政を中心に伐開、下刈りを実施することとなり、再び人々が訪れる城跡を目指した環境整備事業が開始されたのであった。環境整備の下草刈りは平成 5 年度より現在も継続して実施されている。さてその環境整備活動の中で重要な発見があった。それは、從来樹木や大量の枯れ葉により埋没した石積みが城内の各所で次々と現れ、やがてこの城最大の特徴である大規模かつ高さのある石積み遺構が姿を現し始めたことである。教育委員会でも、中世城郭におけるこの遺構の重要性を鑑み下草刈りと併行して現況立面図の作成を平成 11 年度より順次実施し、出来る限りでの現状記録に努めてきた。また平成 13 年度にはその構造を把握するため、トレンチを設定し発掘調査を実施、カワラケの一括出土をみた。

こうした状況のなかで平成 14 年 9 月 5 日、比企地域に所在する中世遺跡の学術的な評価を行なうとともに、将来的な保存・活用策を調査、検討することを目的に文化庁記念物課を指導機関として、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課及び埼玉県立歴史資料館が事務局となり、比企地域の各教育委員会が協力機関として「発掘調査等評価指導委員会 比企地域中世遺跡検討委員会」が設置された。

この委員会において、「小倉城跡に関しては中世山城として大規模な石積み遺構と技巧に富んだ繩張りをもち、かつ城下集落を伴う可能性もあり、周辺の風致を含めた遺構の遺存度の高さから高い評価を得てきた城跡ではあるが文献資料がないため来歴が明確ではなく、繩張り研究と歴史的背景から後北条氏による築城とされてきたものの、これらを考古学的に裏付ける学術調査の必要性」が求められた。村教育委員会では委員会の指導・助言を受け、城跡に関して、①年代を明らかにする、②構造・性格・特徴を位置付ける、③保存状態を確認する、この 3 点を主たる目的として発掘調査を実施することとなった。調査箇所・調査方法に関しては上記の目的から委員会の指導を受け郭 1 中央部に幅 3 m で十字のトレンチを設定し調査を実施することとなった。委員会は年 3 回開催され、その都度指導・助言を受けながら調査を実施した。調査において現地表下 5 ~ 15 cm に結晶片岩系の岩盤がかなりの部分発達し遺構は岩盤を掘削、穿って構築されており基本的に良好な保存状態であることがわかった。また、調査はトレンチによる遺構確認を主としたため、基本的に遺構の掘り下げを行っていないが、平成 16 年度には 15 年度に確認された郭 1 内建物跡柱穴の半裁、土星壠の石積み遺構の精査等を行い、カワラケ、陶磁器の出土が見られた。

本報告は 16 年度実施分で、整理作業は平成 17 年度に行なわれた。総調査面積は、230 m²である。発掘調査の実施に際し、村教育委員会から文化財保護法第 58 条の 2 の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会教育長宛提出し、平成 16 年 5 月 6 日から平成 17 年 3 月 25 日まで調査を実施した。

2 発掘調査と報告書刊行事業の組織

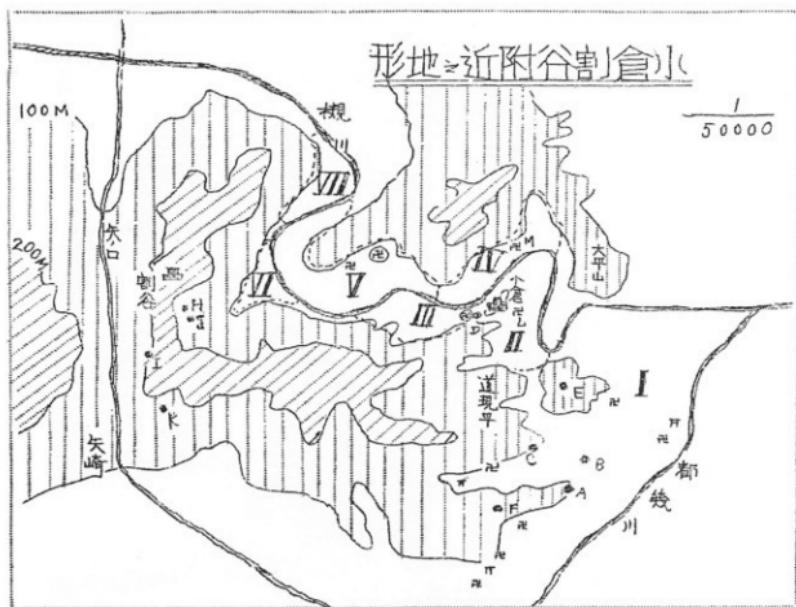
事務局

教育長	野口昌夫
事務局長	大澤幸正（平成16年度）
事務局長	内室睦夫（平成17年度）
事務局長補佐	内室睦夫（平成16年度）
教育総務係長	石川安司
社会教育係主任	田中伊久夫（平成17年度）
社会教育係主任	田中和浩
社会教育係主事	押田貴久（平成16年度）
社会教育係主事	矢部亮司（平成16年9月退職）
教育総務係主事	落合麻美（平成17年度）
発掘調査・整理報告書刊行事業担当	矢部亮司 石川安司

II 地理的・歴史的環境

1 地理的環境（平成15年度報文に加筆）

小倉城は比企郡玉川村大字田黒字城山に所在し嵐山町遠山、小川町下里の境界付近に位置する。外秩父の山地帯と関東平野の境界にあり、大きく蛇行を繰り返す櫛川と大平山（嵐山町）や正山（玉川村、嵐山町）の山地に囲まれる。その構造は、城山と山麓の大福寺の平場を主体とする根小屋を持つ可能性が高い梯郭式の山城で、大福寺前面の構堀、城山の南北より流れ出る自然の谷、小倉集落を載せる段丘と櫛川、更にその外側に広がる山稜など自然の地形を巧みに取り込むことにより幾重にも重なる同心円的に画された空間の中であり、自然地形を利用した総構え的な景観を有する（注1）（図1）。城からは、櫛川の上流下里方面と下流（都幾川）の菅谷、鎌形、大藏、唐子、松山方面の視界が良好に確保されておりこの城にとって繋ぎの位置的にある青山城をはじめ菅谷城や遙かに松山城（昭和11年頃）が目視出来たとされ（小鷹1936）山上からの視界は充分に確保されていた点は確認しておきたい。従来、周りを高山に囲まれ陰の城または築城の定石（尾根続きに小倉城より高い峰が連なる）に反する立地などと称されたが（注2）、この城にとっては青山城と菅谷、大藏、唐子を含めた都幾川（櫛川）流域への視界の確保がまず欠かすことのできない絶対条件であり、その為にこの地がわざわざ占地されていると解せよう。城は下流域（都幾川中流域）を極めて重視している。都幾川（櫛川）の重要性は鎌倉時代以来、武藏型板碑の石材搬出における大動脈として機能してきた経緯があり、戦国期に至っても比企地方と南関東の物流を語る上で重要であった点にかわりはないと考えられる。従来小倉城は鎌倉街道など陸路上からはやや奥まった地点にあり同街道上の菅谷城－杉山城－高見（四津山）城に対し、設置理由がいまひとつ不鮮明であったが、鎌倉街道上道と山の根筋（現在の県道飯能－寄居線またはJR八高線沿線ルート）の中間地域にあり双方にアクセス出来る点は戦国期の中武藏地域主要道の変移を想定する見解があり（齋藤2005）重要な点である（図2）。この城は、櫛川、都幾川ルートによる河川交通と合わせて鎌倉街道と山の根筋による陸路の掌握を担っていた点を指摘しておきたい。

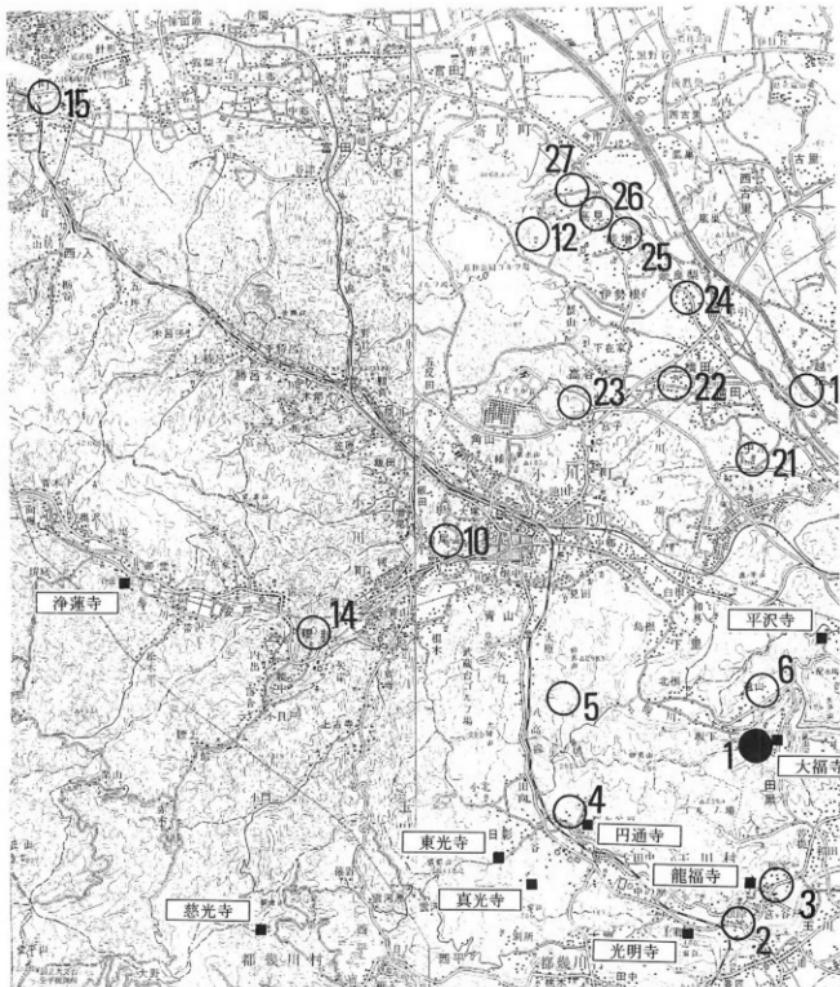


山王 E 僧佛 D 塚長 C 楠原 B 山場隣 A
しやほお・數々屋治銀 H 汪賀子 J 里山や K 沢かたは I
寺山達 M 寺福大 L

第1図 小倉城周辺概要図（小鹿健吾『郷土玉川村史』より改編転載）



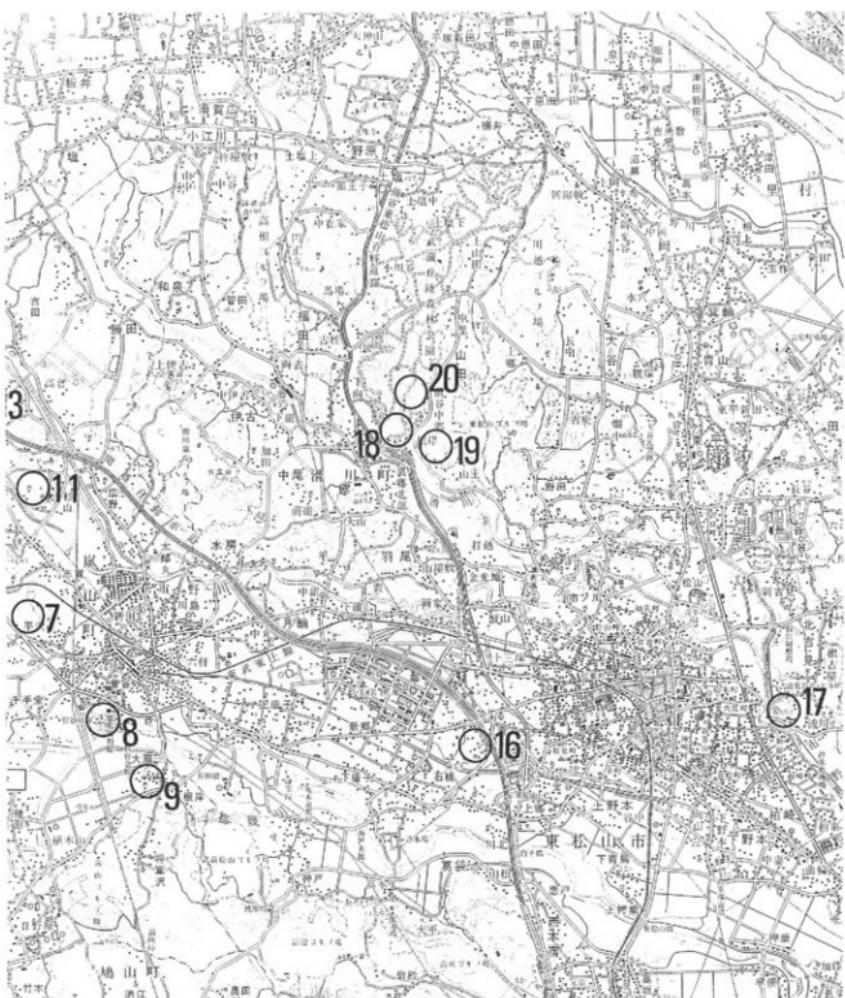
第2図 小倉城周辺戦国期街道要図（斎藤 2005 加筆転載）



第3図 周辺の遺跡（1）

2 歴史的環境

同時代の文献資料は現在確認されていない。ただし、発掘調査により15世紀末～16世紀前半の遺物が確認されたため、長享4年（1488）小倉城から一山隔てた平沢寺に山内上杉方の陣所がおかれた須賀谷原の合戦、その後、山内上杉氏により重視された「須賀谷」の地に関する記録には注意する必要がある（注3）。記録的には江戸時代の地誌類に登場し城主は新編武藏風土記稿で遠山氏、



第4図 周辺の遺跡（2）

武藏誌で遠山氏または上田氏とする。

城主とされる遠山氏を開基とする遠山寺の記録では、開山歎悟全芳が深谷上杉氏と関わりをもち永正十五年（1518）示寂していることから山内上杉氏や深谷上杉氏からのアローにより 15世紀後半以降の地域史を再検討する必要もある。また、『遠山寺過去帳』記載法号、没年記事と『浅草寺誌』『改選諸家系譜』記載記事が一致する点を評価する指摘がなされており（利根川 1991）研究深化が期待される。

周辺の遺跡（1、2図）には、櫻川を隔てて西 500m にある No.6 山根遺跡（13～16世紀）がある。



第5図 小倉城跡概要図

発掘調査が実施されておりピット群、石敷き造構、塚、銭埋納造構などが確認され、深鉢形とホウロク形の内耳土器、古瀬戸後IV新～大窯I期段階と大窯III、IV期段階の瀬戸美濃製品が出土しており、年代消長としての定点資料が存在する。櫛川下流 2.3kmにはNo.8菅谷城跡があり県立歴史資料館建設や城跡内整備に伴う調査により、やはり古瀬戸後IV新～大窯I期段階の瀬戸美濃製品、15世紀代の白磁皿が出土している。上流 2.5km にNo.5青山城跡、都幾川流域で南へ 2.5km ほどのNo.2玉川陣屋跡・根際遺跡（12世紀末～17世紀前半）がある。玉川陣屋跡では、B群の染付碗、C群の白磁、深鉢形とホウロク形の内耳土器が出土している。北東へ 1.5km に須賀原の合戦のおり陣所のおかれた平沢寺（12世紀中頃～16世紀）が所在する。また平沢寺関連では、そのエリア内と考えられるNo.7達藤遺跡でピット群、井戸群、土坑、溝跡が検出されている。遺物は中世前半期から断続的に出土しており古瀬戸後IV新～大窯I期段階の瀬戸美濃製品も出土している。その他、村内には山の根筋に属する中世円通寺にかかるNo.4栗ヶ谷戸遺跡群で14～15世紀の大量の在地土器が出土

し、玉川陣屋の対岸にあたるNo.3玉川堀ノ内遺跡群でも15世紀代の遺物が出土している。また比企地方の鎌倉街道上道沿いの状況が小川町教委の精力的な調査、報告により明らかとなってきている。即ち、No.21日向、22中井、24台の前、25六所、26町場、27日丸等の諸遺跡で井戸跡、建物跡、土坑等が検出され、何れも15世紀～16前半頃までをピークとし日向、中井遺跡へと収束していった傾向が伺える。

3 遺跡の概観

a 郭1について

小倉城跡郭1は標高137m城山の最高所に位置する。内部は2段構成となり虎口は北、東、南の三方向に開きいずれも石積みを伴う堅固で視覚効果を高めた造りとなっている。東虎口の北続きにも土塁が切れ虎口状の形状が見られるが、トレンチ調査の結果、石積みを伴わず他の三箇所とは明らかに違い時期を異にすることが判明した。山麓に伸びる木落状の掘り割り遺構と方向が一致する状況から後生開削された可能性がきわめて高まった。土塁は、下段で西側の一部を欠くほかはほぼ全周する。即ち、北虎口から東虎口、東虎口から南虎口、南虎口から西面の一部までは土塁が存在する。西面は土塁のない部分を内郭側に半円状に段切りし平場を形成し上段部へと繋ぐ。この部分は、前年度調査によると何度かの改修が認められ、当初面は1.5m程下で排水溝を伴い最下層から白磁C群の皿が出土している。この地点では改修が認められることから当初から土塁が存在しなかったのか、或いは存在したが取り払われ現在の形状となったのかは今のところ判断がつかない。また上段平場にも20～40cmと極めて低い土塁状の高まりが所々途切れながら巡り、下段との区画施設と上下段と連絡する虎口状の出入口施設が想定されよう。

b 郭1石積み遺構

郭1内郭土塁堀部分と南虎口周辺、北虎口へ至る通路西面で石積み遺構が確認された。南虎口周辺では、3箇所のトレンチを設定し、虎口から直角に接続する土塁にかけて連続的に石積みが検出された。その積み方は、柵目積みを基調とし雄壇状に3段構成としたあと斜面で立ち上がり土塁頂部へ至るが、途中明瞭に積まず無作為に石を集めし大きな段を造成する。斜面部は碎石状の層石が舗装のように一面に見られた。さらに東虎口へ至る中間地点でも石積みを確認しており、南虎口から東虎口へ続く土塁堀は、前面石積みとなる景観に復元出来そうである。また北虎口へ至る通路2西面でも、石積みが露出する地点があり、トレンチを設け精査し現況立面の作成を行った。これらにより、郭1内においても、石積みが大規模に展開することが予想出来る状況となり、郭1の空間的意義付けにも重要な視点が提供されたと言えよう。

注

(注1) 郷土史研究の大先達であり県指定当時(昭和11年)地元玉川尋常小学校へ教頭として赴任しておられた小鷹健吾氏は『郷土玉川村史』の中で下里から嵐山渓谷までの櫛川の蛇行により形成された小倉(玉川村)、遠山(嵐山町)、坂下(小川町)の閉ざされた集落とそこを縫う隘路について、小倉城に関わる集落として位置付け「天然の内曲輪」と解している。極めて先駆的な卓見であろう。その検証は今後の地域研究の中で明らかにしてゆかなければならない。

(注2)『日本城郭体系』第5巻 埼玉・東京

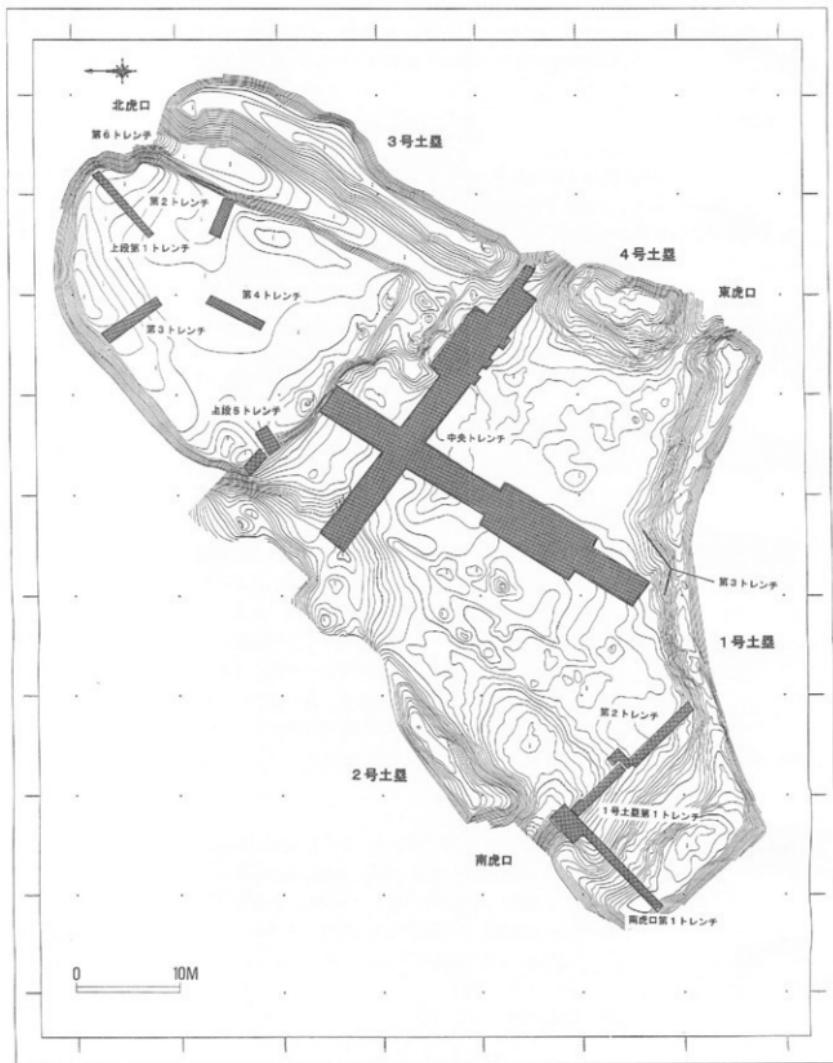
(注3)『梅花無尽藏』『松陰私語』ほか

参考文献

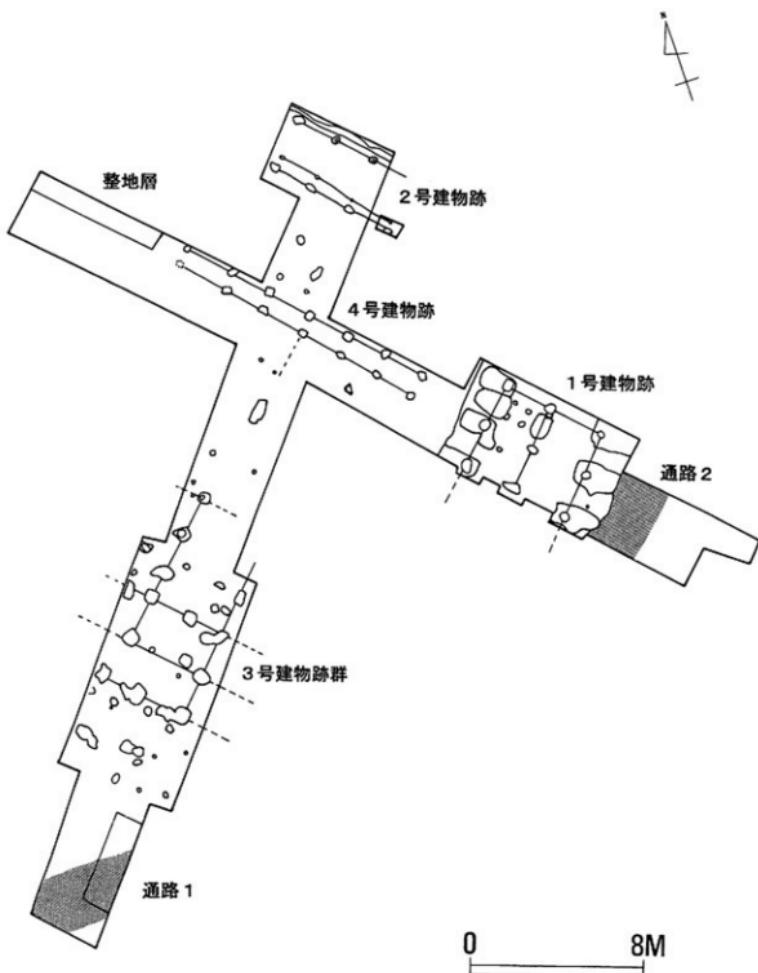
小鷹健吾 1936『郷土玉川村史』

利根川宇平 1911「中世の玉川村」『玉川村史』通史編

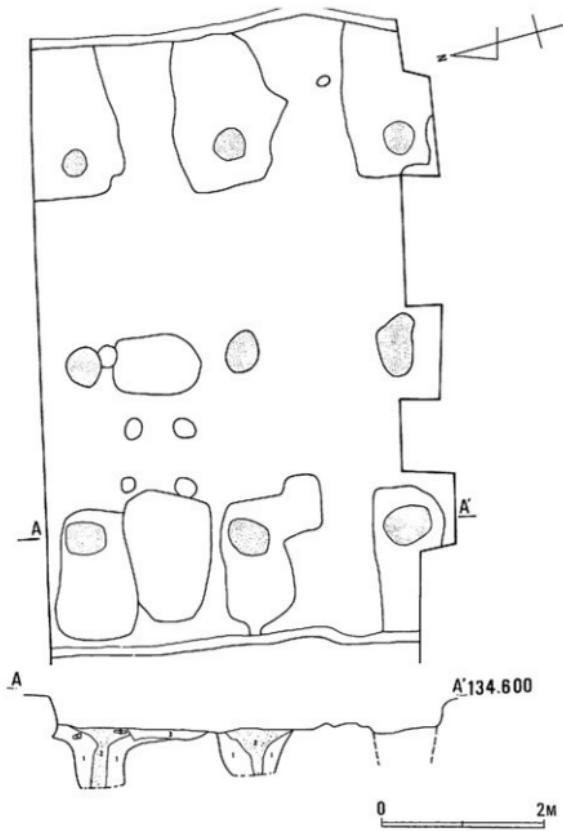
齋藤慎一 2005「中世東国の街道とその変遷」『戦国の城』高志書院



第6図 本郭トレンチ配置図



第7図 中央トレンチ遺構配置図



第8図 中央トレンチ 1号建物跡

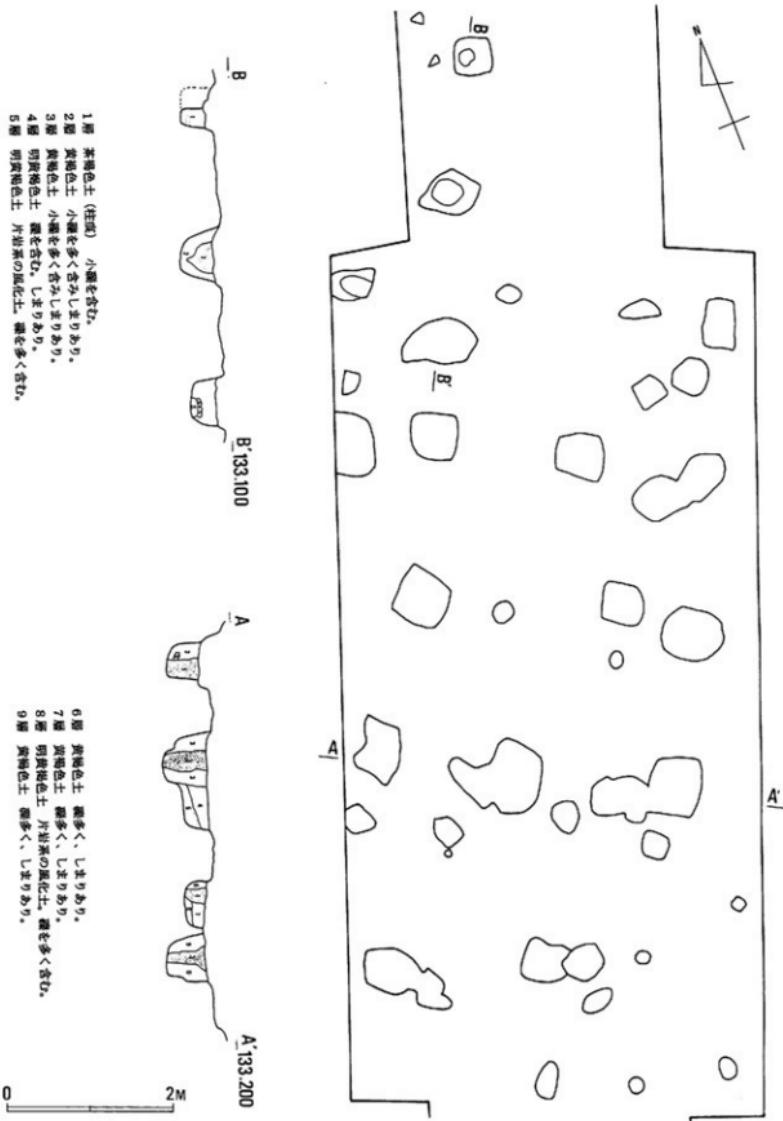
れ覗いていた状況であった。上段第1～3トレンチは土壘状の高まりの構造確認、同4トレンチは上段部の土層と遺構の有無、同5トレンチは上段部と下段部との連絡確認のため設置した。1号土壘第1、2トレンチ以外は現在も継続調査中である。

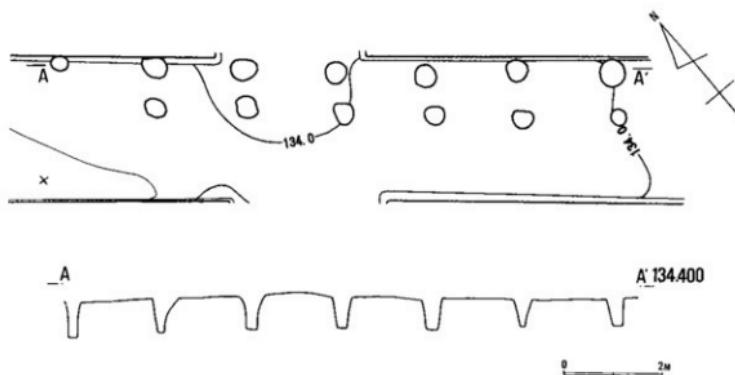
1号建物跡

中央トレンチ東寄りに確認された。総柱構造の建物で、現在トレンチ内には9箇所の堀方が確認されている。建物を載せる地山岩盤は周囲（南側未確認）を5～10cmほどの段をもって整形されている。さながら、当建物跡を載せる為に、岩盤を削りだし、くくりつけの低い基壇状の平場が造り

1 遺構

平成15年度より継続とした中央トレンチでは1号建物跡と2号建物跡部分で拡幅を行い広がりの精査と柱穴の半裁などを行った。3号建物群では、確認面で切り合いが予想された南西端の1列3本と北東方向へ伸びる列の内、西列3本を半裁し土層の確認を行った。十字トレンチの交差する未精査部分では新たに2列の柱穴列が確認され4号建物跡とした。1号建物跡については、大規模な堀方と特殊な構造を持つ為、現在も継続調査中である。また平成16年度には新たに11箇所のトレンチを設けた。南虎口第1トレンチと1号土壘第1、2トレンチは、南虎口内部の構造、特に虎口にL字型に接続する土壘の段構造の把握の為、設けた。1号土壘第3トレンチは、郭1内郭土壘への石積み状況の確認のため、また上段第6トレンチも通路2、西面の石積み確認のため設置したもので、既に石積みの一部がそれぞ





第10図 4号建物跡

出されている感が強い。南西へ延びる可能性もあり桁と梁りの関係は未確定であるが、掘方の向きと形状から梁行き 2間、桁行き 2間 + α と考えられる。向きは、通路 2 や上段平場切岸、1号土堀のラインに平行または直行し郭内の造成企画に一致する。確認面から既に大量の焼土と焼けた壁土が柱底を中心で確認されており柱間の計測が可能であった。梁行きは、不揃いで西側 2.2m、東側が 2.5m、桁行きは、1.95 ~ 2m と調べておりこの数値は 6 尺 5 寸と解される。桁方向の柱穴は長大な掘方を持ち、概略隅丸長方形で長径 2 m 弱、短径 1 m 前後と極めて大きい。梁の柱は、目立った掘方は持たない。継続調査中であるが、半裁した 2 本の桁柱掘方は、深さ 0.7m でもまだ底面を確認できない。掘方内の充填土ではなく、片岩を碎いて碎石状としたものを用いて版築している。遺構確認状況から、建物自体は焼失し片づけ行為が行われている可能性が高い。

2号建物跡

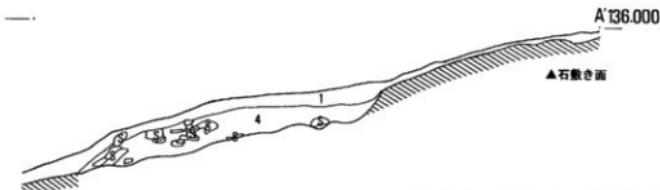
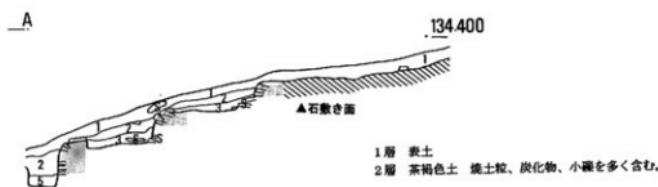
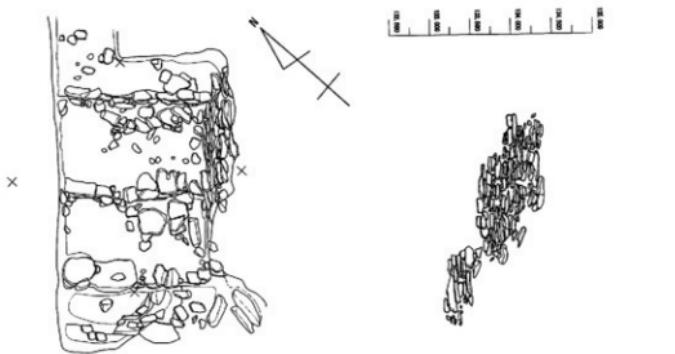
中央トレンチ北端で上段平場直下に位置する。区画などの柵列の可能性もあるが、梁筋が揃うこと、南西に当建物を外れると僅かに段状に岩盤が整形されることから建物と解した（1号建物の造作と同じ構造か）。建物の向きは、北側背後の岩盤切岸の向きに一致（規制）し、規模は梁行き 1 間（柱間 2.3m）、桁行き 3 間 + α （柱間 2 m）である。地表から確認面までの間で白磁 C 群、梁付 C 群、備前窯、常滑窯等の破片が出土したが建物への帰属は不明である。

3号建物跡

中央トレンチやや南よりの地点にピット群が確認されており、トレンチ内では明瞭な建物として復元出来ないため、建物群とした。実際には何棟かが切り合ったものと考えられるが、1、2、4 号の建物と柱筋を同じくするものもあり間仕切りのある大型建物が存在する可能性もある。切り合ひの想定される A-A'、北側へのびる B-B'（柱間 1.8m）でそれぞれ半裁し土層観察を行った。なお、A-A' の真ん中の柱穴において白磁 C 群皿の破片が出土している。

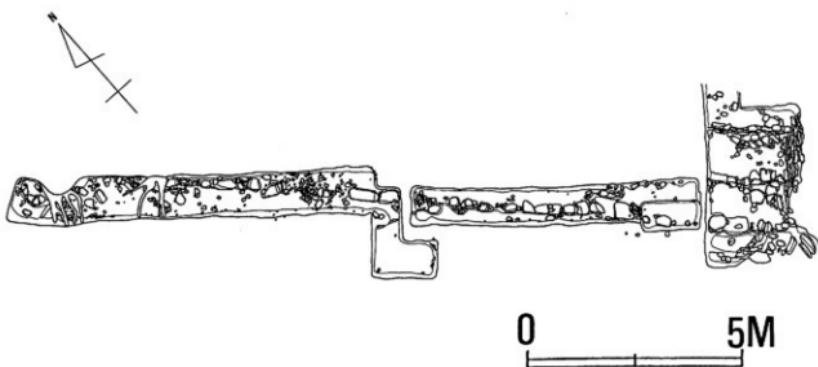
4号建物跡

十字トレンチの交差する付近に展開する。当初、地山の岩盤が 10cm 程度潜りこんでおり、茶褐色土が覆っていたため大きな溝などを想定し発見が遅れた。1、2、3 号建物跡からそれぞれ中心に向かって標高が下がり、当地点が最も低く独立した構造物の可能性が高い。1.8 ~ 2.0m と不揃

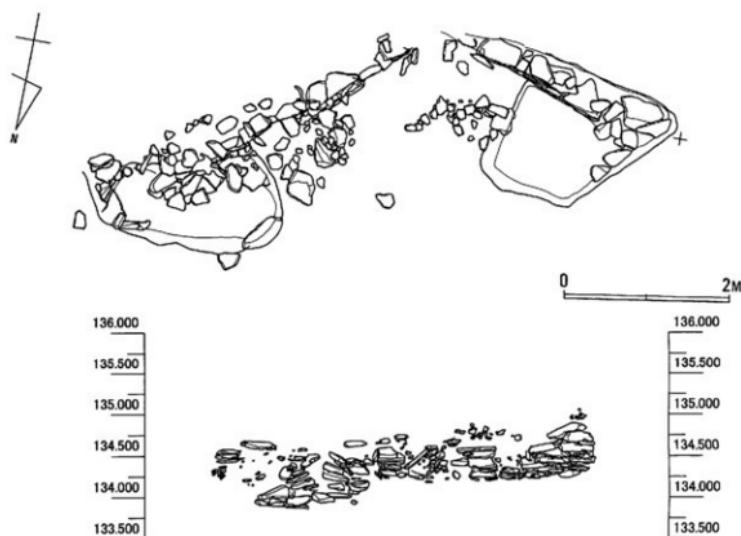


3層 赤褐色土(被災面) 焼土粒とブロックを多く含み、礫や遺物も含有する。
部分的に焼土面として確認どころもある。
4層 暗灰色土 砕石状片岩片を主体とし、大中の礫を大量に含む。(段造成土)
5層 黄色土 ロームを主体とする。しまりあり。

第11図 南虎口第1トレンチ1号石積み



第12図 1号土壙第1・2トレンチ1号石積み



第13図 1号土壙第3トレンチ2号石積み

いな2列の柱穴列が6間分（南列は立木があり確認不能）他の建物跡と同じ軸方向で検出された。列が近接することから建物とするよりも柵となる可能性も否定できないが南に繋がる可能性のある柱穴が見られることからここでは建物跡としておく。いずれも半裁し土層確認を行い、北列の西端



第14図 郭1上段第6トレンチ3号石積み

ピットより礎盤状の常滑甕片が出土している。確認面では不明確であったが 10 cm 下方以下では岩盤が残り残存状況は良好で、使用された柱は角柱であることがはっきりとわかった。

1号石積み遺構（南虎口第1トレンチ、1号土壘第1、2トレンチ）

南虎口第1トレンチで3段の雑段状石積み、上方へ続く片岩片や碎石状の石屑を敷いた緩斜法面、更に上方で整然と積まず無作為に大中の片岩片を集積して造成された大きな1段を確認した。斜面の造成については法面維持と下方からの視覚効果を演出している可能性もある。確認された石積み段は、下段が7石前後約50cm、中段が5石前後約40cm、上段は3石前後約25cmであり上方へ次第に低くなる造りとする。この段の延伸方向は直線で1号土壘の柄杓状に折れ曲がる対面へ繋がることを確認している（図12）。3段ともステップにあたる路面は被災しており特に虎口に近い面は著しい。虎口隅2段目より、鍵穴の飾り金具と常滑11期前後の甕口縁部（注1）が出土した。また1号土壘第2トレンチでも大窓2～3段階前半の徳利片と在地火鉢が出土している。南虎口第1トレンチは現在も継続調査中である。

2号石積み（1号土壘第3トレンチ）

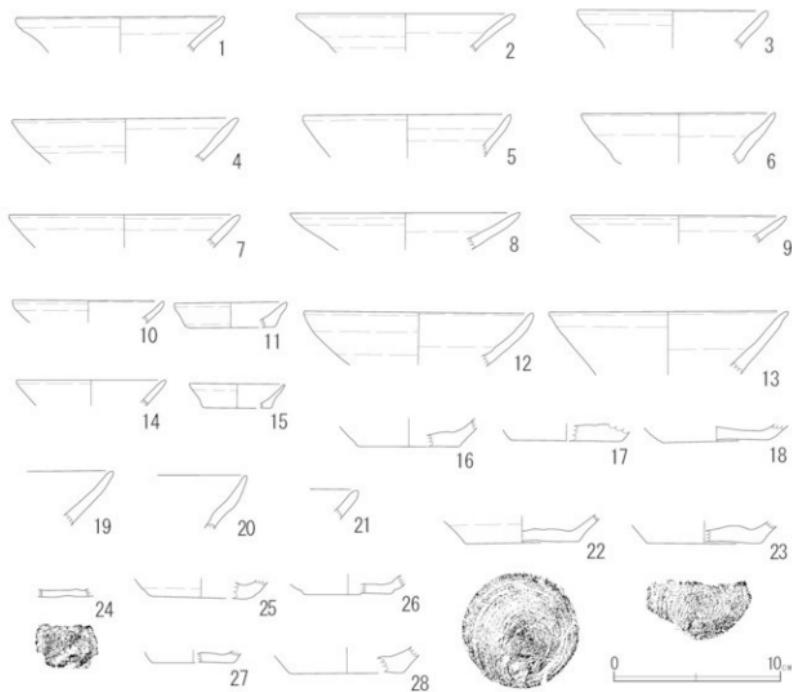
南虎口から東虎口へ至る中間で、くの字状に土壘が折れ曲がる地点で確認された。平面形は、くの字の入構（土壘から見て）で角度は120°を測る。高さは残存部を組み合わせ復元すると約1mとなる。この部分の石積みは粒が揃った大型石材を柱目積みに面を合わせて丁寧に積んでいることが伺え、他の部分とは異質な感を受ける。土壘頂部から崩落した石材に混じって渥美甕片が出土している。石積みの裏には積み始めの基礎となる可能性がある硬化面と片岩片による破碎礫群が確認され、現在も継続調査中である。

3号石積み（上段第6トレンチ）

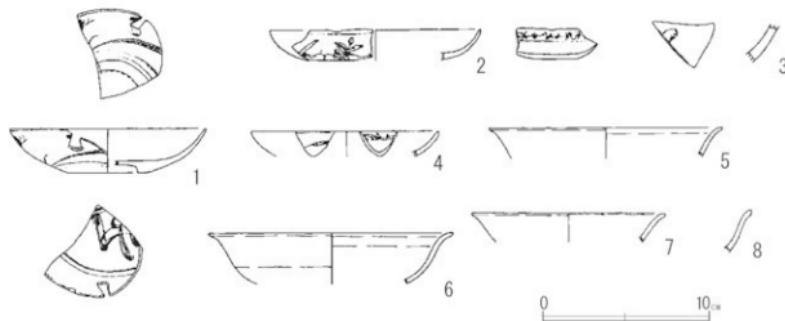
北虎口へ向かう通路2の西面に確認された。立面図のみ作成し埋め戻しを完了している。高さは約60cmで中型以下の石材が使用され間詰めされた片岩片なども確認できる。長さは8mに渡り図下したが、北側へは虎口へ向かい連続していることが判明している。しかし南側では隣接して確認できず約8m隔て面を達えて石積みを確認しており、西面のラインに折れ歪みが施されている可能性もある。通路2の両端ラインを観察すると北虎口内側で僅かながら膨らみ、中心に向かってつぼまる傾向があり、虎口内側に何らかの空間を想定することも出来よう。

注

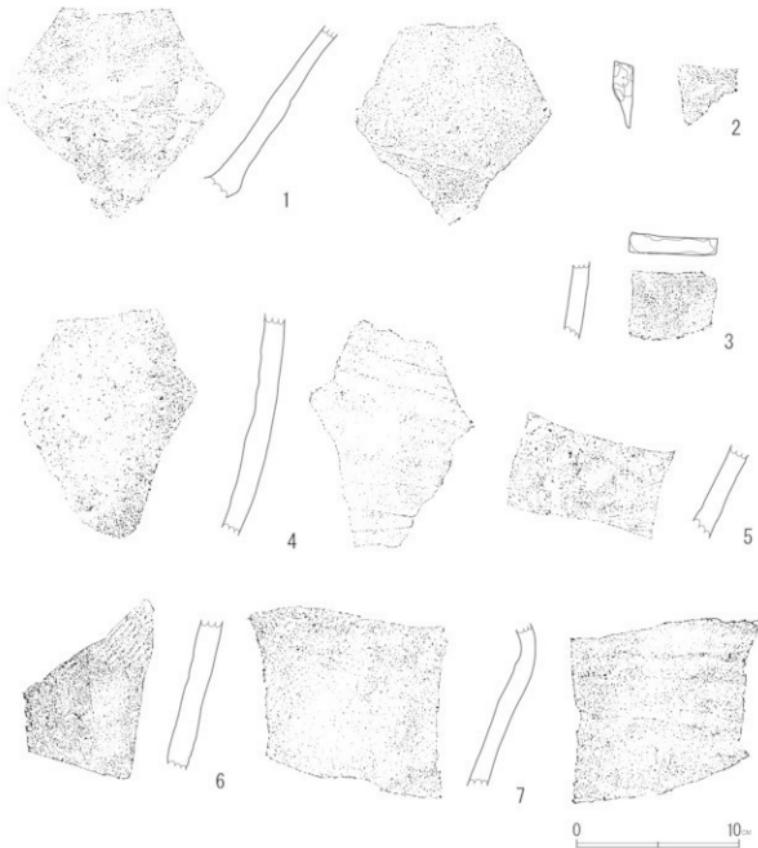
注1 調査中に持ち去りにあった。調査担当者としての自責の念に耐えない次第である。



第15図 郭1出土カワラケ



第16図 郭1出土染付・白磁

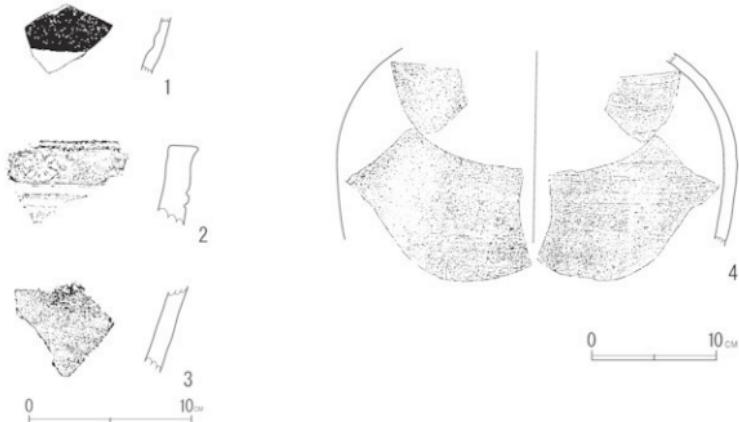


第17図 郭1出土常滑・渥美

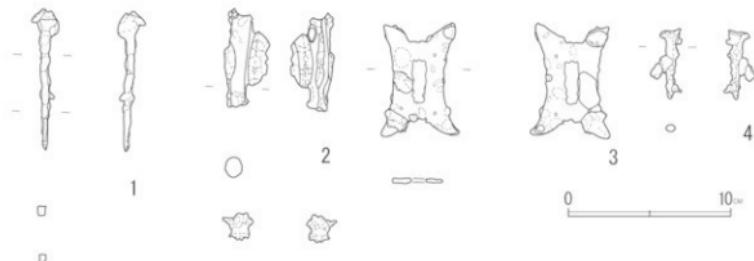
2 遺物

出土遺物には、カワラケ、搬入陶磁器、在地産火鉢、鉄製品があった。出土状況は第16図-6白磁C群皿が3号建物群のビット内から、第17図-7の常滑窯片が4号建物のビット内からそれぞれ出土しており第17図-7は遺構に伴う可能性があるが漆継ぎの痕跡がありかつ甕であることを考えると伝世の可能性が極めて高く、この資料による建物の年代決定は難しい。その他の遺物は、確認面までの間で出土したもので殆どが細片で遺構への帰属も判然としない。ただし、1号石積み遺構の火災面付近から出土した11期前後の常滑窯片、第18図1の大窯2～3前半の徳利、2の火鉢などは1号石積みの年代の一端を示している可能性もあり、今後慎重に検討してゆきたい。

第15図はカワラケである。いずれも小破片からの復元であり器形には一定の誤差を含む可能性



第18図 郭1出土瀬戸美濃・備前・在地火鉢



第19図 郭1出土鉄製品

がある。口径が14cm前後の大型のものと12~13cmの中型のもの、6cm前後の小型のものの3種ある。胎土は、まちまちであるが24は白色系のややざらつき感のある砂粒を含む胎土で、平成13年度調査の郭3外面石積みトレンチから出土した一括カワラケと同一のものである。同じ胎土の物が何時期かに渡り流入したものか同一段階のものは判断が付かないが、郭3の石積み年代を示す可能性の高い一括資料の検討材料として重要である。また器形は立ち上がり中位に腰をもち口縁部に向かって口辺部が肥厚するタイプが一定量存在し15世紀末~16世紀中頃までの資料が含まれていると考える。別稿を用意したい。10と21は口径は異なるが口唇部に面取りがある。22は底部が完存しロクロは左回転。内底面中央にはへそ状の瘤みが見られる。23も底部が1/3程度残る資料でロクロは左回転である。第16図は舶載の磁器類である。1は染付C群皿で、平成15年度報告で底部付近を既報告しているが、16年度に口縁部接合資料が出土し再掲載した。2は染付E群の皿である。器面に擦痕状の傷が多くかつ火を受けて器面が荒れている。16世紀後半の資料といわれて

いる。3は小破片のため分類は不能で、大皿の一部である。4も染付E群の皿か。5～8は、白磁の塊皿である。5、6はやや大振りで15年度報告の白磁皿類より一回り大きい。第17図は、1～5、7が常滑窯片で6は、渥美の大窯片である。1は底部付近の破片で僅かに砂底が確認できる。2、3は小片であるが破面に漆緋ぎの痕跡が見られる。4、5は1号石積み遺構の2段目ステップより出土した。4は胎土中に非常に多くの砂粒を含む。6は同一固体と思われる胴部片資料が前年度より複数出土している。やや厚手で押印が見られ僅かに削りの痕跡が見られる。常滑編年の2～3期に当たろう。7は4号建物の柱穴中より礎板状に水平の状態で出土した。4面ある破面の内3面に漆緋ぎの痕跡が認められた。第18図1は瀬戸美濃製品で大窯2～3期前半の徳利胴部片である。1号石積みの南東へのびる石列中より出土した。2は角火鉢、3は丸火鉢の破片である。2は口縁直下に所謂菊花文による押印を施すが、間弁状の表現があり6弁ずつ主弁と間弁の表現が見られる。3の資料では僅かに菊花文の一部が確認できる。4は備前の壺で、内面には擦痕状の調整痕が頗著に残る。破片からの復元であり器形的には問題を残す。第19図は鉄製品である。1と4は釘、2は不明である。3はクルリ鍵の鍵穴飾り金具である。クルリ鍵を持つ建物の性格を限定できるかどうか現在知り得ないが郭1に建っていた建物の性格の一端を完明する重要な資料である。

II 小 結

平成16年度は、15年度の継続を主体に郭1内郭部分での石積み遺構の確認を加え調査を行った。15年度の成果に対し訂正、又は追加される点は、①城全体の年代観として染付E群皿の出土により16世紀後半階層がより鮮明となった。また前年度報告（石川2005）で15世紀末（染付焼B群）とした同報文第16図10は16世紀中葉の資料と訂正される。従って、城は大きく15世紀末から16世紀後半としながらも、始まりがより16世紀前半に重心を置いたかたちと理解される。出土カワラケの中には15世紀末から16世紀前半に位置づけられるものが有ると考えており後考したいと思う。遺物的には、搬入陶器器の中で前年度同様白磁C群の優位（白磁2：染付1）が目立ち、備前の壺の出土が注意される。②この城の最大の特徴である石積みについては、内部空間に対しても施されることが判明しだけな成果があがった。その構成は、細かな違いはあるが石積みを礎壇状に設ける大筋では鉢形城跡伝秩父曲論（石塚2000）や同じ氏邦系とされる石積みが確認されている群馬県箕輪城跡三の丸（秋本2001）などに類似する。今後、郭内部に石積みを行う意識やその系譜を巡って比較検討してゆかなければならず、この城の位置づけにとて重要な視点となる。また石積みの構造把握についても徐々に進んでおり、たとえば2号石積み裏の礎群や半築層の確認、間詰め石（加工礎）の存在などがそれで、採石から加工、施工にいたる様々な場面に生じる屑石の利用までを含めたトータルな世界が見え隠れするようだ。郭1の石積みについては勿論在地的ではあるが、案外進んだ段階の技法を持っている可能性も出てきたわけである。それは、郭3に代表される外面に施された高さのある石積みとは、外観上差異をもち時期差として表現されるものなのか、施工場所と目的に規制されたものなのかは判断がつかない。今のところは、城内でも分類可能な石積み遺構が存在すると位置づけておきたい。③建物跡は、1号建物跡に代表される特殊な構造を持つ建物の存在と郭内の造成と一体的であることを伺わせる企画性の高さを指摘しておきたい。④石工の問題は、②とかかわるが争点として、鎌倉時代以来付近に居住していたであろう武藏型板碑石材の採石に関わっていた工人との系譜関係があげられる。当初よりこの点については注意深く観察しており、城内で数種の鑿痕を確認している。武藏型板碑に残された工具痕との比較から両者の関係にアプローチしたいと考えているが、板碑に残された工具痕が最終形であることを考慮すると、未製品を含め幅広く比較検討されなければならないだろう。

以上、小倉城には極めて広がりのある多くの課題が横たわっていると言えるが、それは単に城としてだけでなく中世東国社会の解明にとって重要な情報を内包する貴重な遺跡として位置づけられる証なのであろう。

参考文献

- 秋本太郎 2001『史跡 箕輪城跡II－平成12年度調査概要報告－』群馬県箕郷町教育委員会
石塚三夫 2000『史跡 鉢形城跡 平成10年度発掘調査概要報告』寄居町教育委員会
史跡を活用した体験と学習の拠点形成事業実行委員会 2005『シンポジウム 埼玉の戦国時代 検証比企の城』
藤木久志監修 2005『戦国の城』高志書院

図版 1



南虎口 1号石積み遺構（2段目）



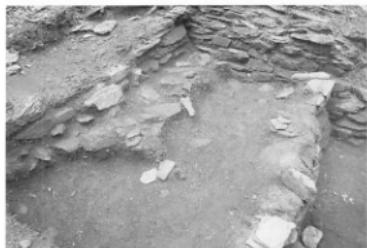
南虎口石列（東から）



同上鍵穴飾り金具出土状況



同上（南から）



同上遺物出土状況



同上遺物出土状況

図版 2



2号石積み遺構（東から）



2号石積み遺構（北西から）



同上（西から）



同上（北から）



2号石積み遺構裏疊群

図版 3



3号石積み遺構



1号建物跡柱痕



1号建物跡柱痕

図版 4



2号建物跡付近遺物出土状況



2号建物跡



同染付C群出土状況



同備前、常滑出土状況

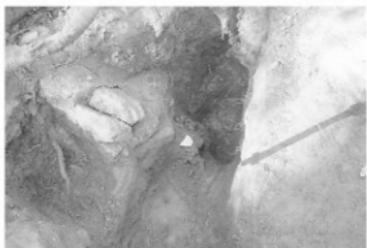


同白磁出土状況

図版 5



3号建物跡群



3号建物群柱穴内白磁出土状況



同上



同上



3号建物群柱穴内白磁出土状況

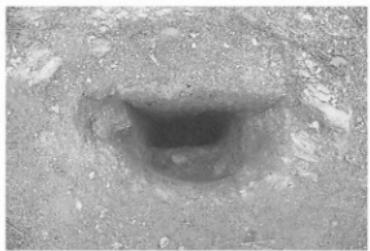


3号建物群跡

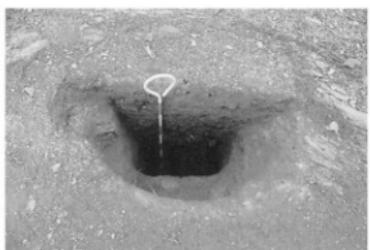
图版 6



4号建物跡



4号建物跡柱穴



同上



同柱穴



同上常滑甕出土状况

図版 7



郭 1 確認面岩盤掘削痕



郭 1 確認面岩盤掘削痕（連続鑿痕）



同上



郭 1 東堀切削面



同上



同上鑿痕

図版 8



郭1 出土カワラケ内面



郭1 出土カワラケ外側



郭1 出土カワラケ内面



郭1 出土カワラケ外側



郭1 出土鉄製品



郭1 出土鉄製品

玉川村埋蔵文化財調査報告第13集
村内遺跡 II

—県指定史跡 小倉城跡 第2次発掘調査報告書—

2005年12月28日

編集・発行 玉川村教育委員会
印 刷 たつみ印刷株式会社